

〔空穂物語藏開〕うへのおとゝ、むまれ給へる君を、いとよきよくのごひて、御ほそのをきりて、このはかまにをしく、みて、かきいただき給、中納言御帳のもとによりてついで、まづたまへやときこえ給、

〔大鏡朱一雀〕このみかどむまれさせ給ひては、御かうしもまいらず、よるひる火をともし、御帳の内にて、三までおほし奉らせたまひき、北野にをぢ申させ給ひてかくありしぞかし、

〔後撰和歌集戀十〕寛平のみかど、御くしおろさせ給ての比、御帳のめぐりにのみ、人はさぶらはせ給て、ちかうもめしよせられざりければ、かきて御帳にむすびつけ、る、略、○歌

〔金葉和歌集雜十〕後三條院かくれおはしまして、後、五月五日、一品宮の御帳にさうぶふかせ侍りけるに、さくらのつくり花のさ、れたりけるをみてよめる、略、○歌

〔枕草子六〕御帳のまへに女房いとおほくさぶらふ、略、○中ひつじの時ばかりに、えむだうまいるといふほどもなく、うちそよめきいらせ給へば、宮もこなたによらせ給ぬ、やがて御帳にいらせ給ひぬれば、女房南をもてにそよめき出ぬめり、

〔中務内侍日記〕はつせにまいりつきて、のぼりらうを入るより、たうとくおもしろきことの世にあるべしとおぼえず、略、○中年月のあらましかふこそと、うれしきことかぎりなくて、御帳もあきておがまれさせ給ふ、

〔安齋隨筆後編十一〕一帳 類聚雜要に帳臺の圖有之候、然ども帳の全體不分明候、今愚按暗推を圖にして問之、○圖

如帳ハ古今變異有之間敷歟、右委細可示給候、

雜要圖に玄隔參差なし、布毎に垂紐あり、此布の數ハ不覺悟也、地白綾にて、唐鳥唐花を五色の糸にて繡せり、紐には胡粉にて蝶鳥を畫けり、帽額はなし、長サハ濱床へ垂かゝりて、蚊屋の長ケのごとくな